

技術士の放浪キャリア

藤田 聡



バイオ系のキャリアデザインに関連して、自身のこれまでの経験が多少なりとも参考になればという思いで原稿執筆を引き受けた。このような執筆の機会をいただくのは実は2度目である。今回は今から10年以上前、本稿のテーマでもある「技術士」の資格を取得した直後に、キャリアパスというコーナーで「サイエンティストとエンジニアの両立は可能か？」なる、若気に満ち溢れた文章¹⁾を恥ずかしげもなく書かせていただいた。これは大学修士卒業後、民間企業勤めをしながら社会人博士課程をなんとか修了し、自身のキャリアのバックグラウンドが大まかに決まりつつある頃にしたものなので、学生や学位取得間もない若手研究者にはひょっとしたら多少なりとも共感（もしくは反感）してもらえる部分があるかもしれない。さて、どんな若者も、皆等しく年を重ねる。本稿では、前回の執筆から10年少し、アラフィフに足を踏み入れた中年研究者が相も変わらず模索しているなかで、とくに技術士に関連して考えていることを書こうと思う。ちなみに前回、同じ号でご自身のキャリアについて執筆された東田氏も次号の本特集（後編）で登壇予定とのことで、併せて時の流れを感じていただければ幸いである。

大学で教職を得る

前回執筆時点では、病院で社内ベンチャー的な細胞バンク事業の立ち上げに従事しつつも、大学に出向しながら研究を続けていた身でもあり、アカデミア職を探していた。当時も今もこうした職種への道は狭いが、とりわけロスジェネ世代真っ只中の民間勤めの身には特に厳しかった。しかし大阪の下町に生まれ育ち、団塊ジュニア世代の競争のなかで、受験、就職、社内競争と、文字通りの席の奪い合いの中でサバイブしてきたおかげか、打たれ強い。10数連敗を重ねてもなお公募を出し続け、その甲斐あって運良く（本当に！）不惑を前に公募に残り現職に着任させていただくことになった。

といっても、多くの方は他人の去就などどうでもいいに違いない。知りたいのは自分がどうやれば公募に勝ち

残れるかどうかという点だろう。これについてはネットを見ればさまざまな言説が溢れているし、なにより、身も蓋もない言い方ではあるがヒトそれぞれである。ひとつ言えることは、諦めないということであり、こればかりは孫正義氏や、安西先生（野暮な注：ロスジェネ世代にはなじみ深い漫画の登場人物）が正しい。もちろん、それだけで職を得られる訳ではないのは言うまでもないが。

技術士資格の「有用性」

さて、本特集で話題となっている技術士の資格の有用性を、アカデミア目線で見てみることにする。なんでもかんでも役に立つか、そうでないかで判断するのは、昨今の良くない風潮と思っではいるが、学生からもこの手の質問はやはり多いので関心は高いのだろう。

まず、公募戦線に勝ち残るために技術士資格は多少なりとも有効だろうか。これは残念ながら、それほど有用ではないように思う。JABEEとの関連で知名度があがってきた（と信じた）のも比較的最近の話で、そもそも技術士という資格名称すらほとんど知らないという大学人も多い。そもそもの話、教員で技術士資格を持っているという人が少なく、多くの大学人にとって、どんな資格かピンとイメージしにくく、その希少性は理解されるが採用判断には繋がりにくいのではないかと。こればかりは、われわれ資格保有者の責務以外の何者でもないで、資格の価値向上とアピールについて研鑽に励むしかない。また、技術士の受験資格には実務経験が必要である。これもなかなか曲者で、大学院の在籍期間は最大2年しか組み込むことができないため、若手ポスドクにとって取りにくい資格となっている理由のひとつでもある。

取得しにくいいうえに、公募でも切り札とならない資格の話などどうでもいいと、ここで読むのをやめてしまう方もいるかもしれないし、本特集の他の執筆者にも睨まれそうなので、今度は、大学教員になって以降、日々の活動で技術士資格が役に立つか考えてみたい。

技術士は業務独占資格ではなく、名称独占資格である。すなわち、できる業務というのが決まっているわけでは

ない。それだけに技術士の世界は広く、そして深い。生物工学会と言うマニアックな集団でも、企業や官公庁、大学、自営などのさまざまな業界や職種、立場の方が在籍されている。こうした方々とのディスカッションは実に刺激になり、これが技術士の最大の面白さでもある。研究の種やヒントになることも多く、共同研究に発展したこともある。また、学生の就職活動にお力添えいただいたケースもある。これらを考えてみると、研究室を主催するPIにとっては、技術士の専門ネットワークは大いに役立ち、(付度なく)メリットは大きいと断言したい。

企業勤めから大学教員への転身

ところで、教員としてのキャリアには大きく分けると、大学や研究機関で順当にキャリアを重ねていくパターンのほかに、私のように企業を経由する道もある。後者のような経歴の人も意外と多いにも関わらず、ケースバイケースのため、そのルートはいまひとつ謎に包まれている(と思われる)。そこで企業出身者の大学教員への転職で重視されるものについて少し述べたい。

企業では、特許や製品化が優先されるため論文業績を挙げにくい方も多い。また、研究職・技術職といえどもゼネラリストが高い評価を受けやすく、専門性を高めにくい傾向にもある。しかし、公募で評価されるのは、やはり論文業績と専門性なので、またまた身も蓋もない言い方で恐縮だが、ここだけは頑張るしかない。

一方で、実務に関する知識、たとえば特許や法令、規制、業界の力関係などは公募での差別化ポイントとなるだろう。最近でこそ大学でも、工学系なら特許のしくみや技術経営論などをカリキュラムでも取り扱うところも増えている。また、各大学とも産業との連携や社会実装に向けた取組みを重視し、とくに、地方大では地域産業への貢献が至上命題ともなっているので、教員にとって避けては通れないものとなりつつある。企業出身者の真価はここで問われるであろうし、転身後にも大いに役立つ。逆にアカデミア出身者は、技術士資格をとって産業界とのネットワークを意識して広げるのも手である。

技術士仲間から得るもの

われわれ技術士は資格の責務として秘密保持義務をもつ。これはすなわち、このメンバーでは突っ込んだ議論を遠慮なく戦わせることができるということを意味する。大学人ならそんな当たり前のことと思うかもしれないが、企業では自社の技術を曝け出すような話は社外で

はできないため、これほど新鮮な交流はない。さらに、先にも書いたように、ここには多種多様な背景の人が集う。皆、それぞれの分野では一家言ある専門家(オタク)であり、社内や近い分野の人と話すだけでは得られない新しい視点がある。専門家は自分の分野について、専門外の者に口を出されるのは好まないものだが、技術士のメンバーはむしろこうした交流を好む。餅は餅屋というが、酒屋や薬屋、時には大工に任せても面白いのである。異分野融合やinterdisciplinaryといったキーワードはよく聞くようになったが、これを地で行く集団と言えよう。また、専門性を磨き上げるには、自分の分野を深掘りするだけでなく、まったく新しい分野を切り開くという方法もある。忌憚ない意見の交換はこうしたことをも可能にする。

ここで、最初的话题に立ち返る。10年前の原稿タイトルに書いたように、サイエンティストの道とエンジニアの道は別物だと考えていた。しかし近頃、実は道は同じで見方が違うだけではないかと思うようになった。

私は昔からドライブが好きで「今日のテーマは国道421号線」というような特段の目的地のないドライブをよくやってきた(ちなみに421号線は“酷道”好きの間ではなかなか有名で、未踏の方はぜひ一度走破されたし)。道中に面白いものがあれば立ち寄るような適当な放浪旅である。往々にしてこういう時のほうが面白いものを発見したり、楽しく思い出に残ったりする。これに対して、ナビをセットして目的地を目指して走り抜けるドライブは、効率的だしスマートだが、何か物足りない。

研究予算獲得のための申請書の書き方の金科玉条も、目的地どころか、そこで何をして過ごすつもりかまで、キッチリ計画に書くことである。しかし実のところ、先を見通せることなどまれで、仮に見通せたところで、先が決まった研究など面白みもない。予想しないところから価値ある発見を拾ったり、分からなかったりするからこそ楽しい。技術士の面々との議論は、そこに道があるから進むという、あてのないドライブに似ている。道の脇にはもしかしたら何か面白いものがあるかもしれない。そんな刺激があるからやめられない。そして、これこそ私が研究者になりたかった理由なのだが、結局のところこれまでのキャリアも、放浪旅そのものかもしれない。

文 献

- 1) 藤田 聡: 生物工学, **87**, 246 (2009).

<略歴> 京都大学工学研究科高分子化学専攻修了。酒造会社で酒類開発，バイオメーカーでバイオ医薬品の製造に従事したのち，病院で細胞バンク事業の立ち上げに参画，並行して京都大学再生医科学研究所で細胞微小環境の制御に関する研究に従事。2011年より現職。研究テーマは，ナノファイバーの医療材料への応用。技術士（生物工学部門）。

<趣味> ドライブ。チューバ演奏。蟬の観察。